ヤンヤ・ハンガー

Hibbea Junko
日比野純子

ある日、一人の男がNの空港に降りた。
出迎えは誰もいなかった。

彼はｐｈｏｎｅのメモを見て、エスカレーターの降り口を確かめ、電車のホームに下っていった。
メモには彼が雇われることになっている英会話学校の名前と、そこの人事を担当している男の名、そしてその電話番号も書かれていた。
男は彼に△△△駅まできてもらえば、学校はすぐだから、迎えに出る、といってきていた。

彼の名はヤンヤ・ハンガー。西洋のVから東洋のNに未知の魅力を求めてやってきたところだ。人々はおだやかで親切、四季の移ろいが自然の風景を作っている、と聞いていた。カルチュアーも珍しく、生活に根づいた仏教的思考は哲学の匂いを放っているように思えた。
（別世界にいよいよやってきたんだ！）
しかし彼は到着した駅の表へ出て、びっくりした。
ゴッタに、目も意識もそれを受け入れるのに疲れるほど、くっつき合った細いビル、ビルのそこここに広告の文字やそれらの多彩色、はためき。
（どう認識すればいいんだ、この視界を？）
それがアジア的カオティックなものとは、薄々気がついていた彼だったが。

そのカオスの中から、視界の下から浮き上がるように小柄な男の顔が出て、「ヤンヤ・ハンガーさんですね？」と流暢な英語でいった。
「ああ、そうです」、彼はそれが迎えに出てきたS.なのだと大急ぎで認める。
「お疲れでしょう、学校を紹介したら、じきにホテルへご案内しますよ。数日中にはアパートも選んでもらえるようになっています」
ヤンヤはすぐに一つのビルの前でS.につられて足を止め、首をあげた。S.が首を上げ、上の階を指していたので。
「三階と四階がスクールになっています」
一階は食べ物屋だった。ドンブリ物の写真がニギニギしく貼られたウインドウの、

すぐ横の階段のそばにエレベータがあって、S.はそれにヤンヤを乗せる。

そうやってヤンヤのNでの一日ははじまった。

三つ見せられたアパートの中から、彼はあえてN式住居を選んだ。新しいビルの中の、狭っ苦しいアパートより、開放感があってむしろ広く感じた。大きな窓があって二階にあるその部屋は家主の庭に向かって開いていた。

しかし床マット（たたみ）は踏み心地が心もとなく、カモイは出入りするたび首を下げなければならなくてわずらわしかったが。

風呂は銭湯というのがあって、外国の人には人気なんだとS.は言い、帰りに案内するといった。

そうしたところにヤンヤは落ち着いてみた。

すると隣りにFからの留学生が居て、彼はシャステというその隣人と英語でしゃべることになった。

シャステはFの奨学金をもらってN語を勉強にきているのだという。

もちろんN語もシャステはヤンヤに少しづつ教えてくれることになる。

シャステの部屋は、真ん中にｒｕｇを敷いてN式テーブルを置き、押入れの外側の襖には墨字の長い掛け軸をかけていた。

彼はときどき正座も試みるらしかったが、「これだけはできない」と座イスに背をもたして脚をのばしたりアグラを組んだりしてパソコンを打っていた。

英会話学校では、すぐにクラスを持たされ、用意してあった教材を消化していかなければならなかった。

初級コースは、彼をたちまち退屈させ、上級コースは、いくらか彼を救った。しかしV人を含む英語のネイティブ・スピーカーには、聞いていたとおりｐａｙ（払い）がよく、N社会も、彼らには甘いようだった。

「それはね、外国人が珍しいからよ。ことにも西洋人が、ここではまだ」と学校で同僚になったキャシー。「それにわたしたちは、無条件でｕｐｐｅｒな人間に見られてるみたいね、他のいくつかの国でもだけど」

ヤンヤは同じ同僚の、自国のVでも軽蔑されていそうな、見るからに卑しい一人

の男を思い出す。彼は女漁(あさ)りにきているのではないか？　Ｎの女性が釣られやすいと聞いて。

Ｖでは彼の耳にもＮの女性は西洋人に陥ちやすいという噂が入っていた。イエロー・キャブという呼び方も、陰では。ヘーイと呼べばすぐに乗せてくれるという。

キャシーは他のアジアの国もいくつか見てきたらしい、同じように英会話を教えながら。

「わたしたちって、得ね。たまたま英語をしゃべる国に生まれたばかりで、世界中をｅａｓｙに稼ぎながら見て回れるんだから」

「逆にＮや英語をしゃべらない国の人たちはかわいそうだね。高い授業料とたくさんの時間を費やして英語を学ばなければならない」

「思うんだけど、英語って強すぎない？」

「うん、いろんな言語があるのにね。駆逐(くちく)していくのかな？　他の言語は」

「もしかしたら、いまだけ?!　もう少しだけ?!　他の言語が英語にとって代わる時代もくるんじゃないかって、思ったりするわ」

「経済力とか政治力とか、そういうものが変わってくるからね」

シャステとはいっしょに銭湯に行ったり、どちらかの部屋でディナーをとったり。

純Ｎ式料理にシャステはこだわっていて、ときどき凝(こ)った一品を出してくれることがある。ヤンヤはＮ式にあまりこだわりがないので、Ｖ式かただの欧米食かわからない肉料理を出すと、シャステは「おお、なんだか生き返ったような気がする」と、普段のこだわりを捨てて西洋人に戻ってしまう。

「バランスがちょうどいいってわけだね、どちらにも」とヤンヤ。

「そうだね、いくらＮ式がヘルシーだと言われても、ぼくらにはむずかしいところがある、魚タンパクだけでは」

シャステはＦで別れてきた恋人の写真をまだ持っていて、「ぼくがＮにくることをあきらめきれなかったので、別れてしまったんだ」

「……」

「どうしてるかな？　もう新しい恋人を見つけてるかな？」

「……いっしょにはこれなかった？　彼女」
「彼女には彼女の行く道があって、ｗｅｂ・デザイナーになろうと勉強中だったんだ、専門学校で」
「それは…仕方ない」
「うん」

その夜、ヤンヤは夢を見た。
石畳の古いタイコ橋の上に自分がいて、その前を行ったり来たりしている女がいる。左手の方へ行ってしまったかと思えば、自分の前へ笑顔いっぱいでやってきて唇を突き出したかと思えばそれが消え、もう彼女の姿は右手へ駆けていく。その後ろ姿だけが彼に残される。
（Ｙ．！）、彼にはそれが恋人だとわかる。少なくとも彼にはまだ恋人。
だが彼女は右手へ駆けていく。
左手には元ｂｏｙｆｒｉｅｎｄ（恋人）、よく知っているクラスメイトが佇んでいて、目が合うと両肩を上げちょっと首を傾げ、お手上げっていう仕草をしてみせる。
（ああ、ボクもいま同じ目にあっている。Ｙ．が彼から去ってボクのところへきたときと）
《Ｙ．！　君は男から男へ渡り歩く女だったのか》と空しく叫んでいる自分。
だってわたしは自由でいたいのよ、などと彼女がすでに言った答が響く。
自由に？　そういう生き方もあるのか。
（自分は古い人間なのか？）と現実でも問うた疑問が夢の中でも現れる。（わからない。一人の女を愛し続けようとするボクの性向は、古い人間観に立っているのか？）
彼は元恋人に尋ねた、〈君はどういう気持で彼女を愛していたの？〉と。
〈さあ、いまとなっては忘れてしまった〉という答。
〈君は結婚はするの、したいの？〉
〈たぶん、するんじゃないのかな、そうできる相手に会ったとき〉
〈じゃあ、彼女のような生き方をどう思う？　愛の永遠なんて信じないんだろう、彼女は〉
〈彼女は彼女だよ。愛は幻影（つかのま）にすぎない、というもう一方の現実的真実を語ってる

のかもしれない、ぼくらに〉
〈…結婚は？〉
〈…さいごには習慣なんじゃないの？　人間関係の。つまりｆａｍｉｌｙとしての愛だよ。男女間の愛は永遠だなんて幼い幻想なのさ〉
〈……〉
元恋人はいなくなった。右手を見ると、Ｙ．と新しい恋人が手をつないで去っていくところだった。

目が覚めて、彼は思った。
（じゃあ、人間間の瞬時、瞬時の愛や、長短はあっても持続する愛の関係は、価値がなく、実在しなかったようなもの？）
（永遠？　何だろう、これは。あるのか、ないのか？　これはひょっとして人間がすがりついてきた妄想？　過去の、あるいは大過去の人たちにとっての時間の尺度？）
（だけど、瞬時、瞬時であれ、長短のあるものであれ、愛の現象、愛の行為は存在したと認めること以外、わたしたちのすがりつく尺度は無いではないか、時間ではなく価値の尺度として）

Ｎの生活に少しづつ慣れてきたヤンヤ。
だがとにかく騒々しい生活に、彼の神経は千々に割け乱れていた。人々は彼のまわりをセコセコと動きまわり、社会はさまざま大・小のノイズで満たされ、彼が持ってきたＮへのイメージは、ほとんどを修正しなければならないようだった。
（蛙が水に飛び込む音、を聞いていた人々はどこにいるんだろう？借景を楽しんでいた人々は？　禅を尊んだ心は？）
（とても実際的だ、物質的だ、ここの人たちは。ｗｅｌｌ（よく）　ｅｄｕｃａｔｅｄ（教育されていて）で有能な人たちなのだが）
気がつくと、彼はＮを探しまわっていた、自分の求めるＮを。
シャステは探しあてたのか？　古いものの中にしかＮはないのか？
（自分が勝手な期待を抱いていただけなのか？誰だって、どこだって、時代は変わっていくものを）

現代のNカルチュアの中に、ひょっとしてNがある？　新しく変わっていくNの精神が？

しかしがまんして学んでみても、彼には納得のいくNの精神が見つからなかった。もちろん彼は不謙虚な人間ではないから、自分のN体験が浅いこと、N語の力が足りないこと、を知っていた。だから断定することはできない。Nが見えない価値（精神性）を貶（おとし）めて見えるものの価値（物質性）だけを評価しがちだと。

そして自分が、どちらかといえば精神的な価値に傾く人間だと知っていた。ぜいたくな持ち物や食事より心豊かなくらし（enriched liife）を、幸福な人間関係を選択する者だと。

慌ただしく仕事に追われ（彼は三ヵ所のｓｃｈｏｏｌｓをかけもちさせられていた。一日に数回、電車に乗ったり降りたり）、目まぐるしい体験をしながら、彼は一年を過ごしてしまった。

まるでN社会にコマのように回されて、自分が見えなくなってしまってるようだった。

コマのように回ったからといって、彼の胸の底の空洞（black hall）が埋まったわけではない。彼はいつもそこに飢え（hunger）を抱えていた。

「女に埋めてもらうしかないね、それは」、シャステはいった、「か、ぼくのように坊さんになるかだよ」

「坊さん？」

「女を断つのさ。空（くう）もまた満腹（full）！」

ヤンヤは笑った、「そりゃあ、いい。だけどほんとに断てるの？　坊さん、女性を」

「断ったと思えば断てる……」

ヤンヤはまた笑いながら、「君のようには、ボクは坊さんになりたくない」

「しからば苦しめ！」

シャステが言ったように、ヤンヤはとつぜんｔｈｅ　ｂｌａｃｋ　ｈａｌｌを忘

れてしまった、ある女性に惹きつけられてしまってから。
彼女は、彼が上級コースを受け持っている新しいクラスに春から入ってきたのだ。
どの女生徒ともちがって、言葉では表現できないN的魅力（？）をもっている、とヤンヤは感じた。
ストレートの長い髪が美しくしなって、やさし気な顔貌（がんぼう）とつつましやかな微笑が謎めいて見えた、男の恋によくあるように。
おまけに彼女は、英語力がかなりあって、会話力はたしかにもう少しではあったが、ヤンヤと無理なく会話ができた。
彼は彼女をデートに誘い、彼女はおどろきながらも彼に近づいてきた。
二人はデートを重ね、親しさを増し、やがて離れているのが苦しくなり、

「えっ?!　結婚するの？」、シャステ。
ヤンヤは報告したのだ、銭湯からの帰り。買い物袋（プラスティック バッグ）の中に石鹸箱を鳴らしながら。
「ボクがNで結婚するとは自分でも思わなかった」とヤンヤ。
「……Nに永住するの？」
「それはわからない。ボクはUやOに住みたいかもしれないし、他の国もまだ体験してみたいしね」
「彼女は従（つ）いてくるの？」
「たぶんね」
「…ありえない」
「従順なのかな？　やっぱり、アジアの女性は」
「まだ、ね。自立的になったら、いまに、無条件で男に従いてくる女はいなくなっちゃうよ、ぼくらの国の女性たちのように。君は幸運に、ｌａｓｔ　ｃｈａｎｃｅをつかんだのかもしれない」
「…ひとにもよるかもしれないけどね。…男に合わせられる女性と合わせられない女性」
「何をやってる人？」
「一般的な会社員。でも有能だと思うよ。いい大学も出てるんだ」
「性格かなあ、男に合わせられるとか合わせられないとかは？」
「…仕事の都合にも、やっぱり、よるのかなあ？」

しかしヤンヤとまいというその女性が結婚するのは大変だった。彼女の父親が、外国人との結婚に猛反対。

「えっ?! なんだよね、ぼくらにとって、その感覚。いまどき?って」

「いやあ、ぼくも驚いた、思いがけない所から火の手があがるんだもの」

それでも二人は結婚した。まず同棲して数ヶ月、まいの父親はあきらめてヤンヤを受け入れ、母親はこっそり娘をサポートした。

しかし決定的だったのは、ヤンヤの、両親の家への訪問だった。

母親がそれとなく受け入れ態勢を下ごしらえしてくれていたところへ、二人はうまく現れたのだ。

父親は一目でヤンヤの体格に圧倒され、二目見るか見ないかに、「よろしくお願いします、お父さん」とN語で言われて、コロリと陥落してしまった。

しかもヤンヤの思慮や教養のありそうなようす、落ち着いて誠実そうな人柄が父親を安心させた。

母親はソワソワと、まるで自分の恋人を迎えているかのように顔を赤らめたりしながら彼をもてなした。

こっそり計画されていた酒や肴の席にはｓｔａｎｄ（控え）ｂｙ（いた）していたきょうだいたちも何食わぬ顔をして集まった。

ヤンヤはすっかり珍しがられ気に入られ、しかし少しは煙たがられたかもしれない。何しろ誰ひとり彼と似た種類の人間はいないようだったから。

シャステとはそれでも行ったり来たりしていた。ヤンヤとまいの巣（アパート）に招いて半日を過ごしたり、シャステの部屋でランチをとったあと三人いっしょに街へでかけたり。裸の付き合いはなくなったけれど。

二人の巣は一般的な集合住宅（マンション）。ヤンヤは家の風呂に入るのに慣れてきた。

シャステの隣りの部屋、ヤンヤの居住あとには中東からのｗｏｒｋｅｒが入ったという。

「彼は英語ができず、N語もまだまだだから、話ができない。おまけに仲間がよくきて大声で彼らの言語でしゃべるんだ」

「ぼくらはVへ、こんどはボクの両親に彼女を紹介しに、行こうと思うんだ」、ヤンヤ。

ヤンヤは幸せだった。何という安らぎ、何という共存感、まいとの。
（もうあのｈｕｎｇｅｒは埋められたのか？　これだったのか？けっきょく？）

しかし、
しかし、
ヤンヤは気づきはじめた、少しづつ。彼女にはほとんどまともな教養がないことに。Ｎ人なら誰もが知っているはずの浮世絵のことさえ、石庭や苔寺のことさえろくには知らないのだ。ましてＶの人たち・社会に、強い影響を与えた禅（ぜん）のことなど。
彼は何も彼女から学べなかった、期待していたものは何も。
ただ生活の中の習慣的思考、たとえば親が子供にいつまでも支配権を持っているらしいとか、上下関係が太いタテ糸になって社会が編まれているらしいとかぐらい、彼女を通してＮが読めたのは。
「この国はｍａｔｕｒｅ（成熟）を求めていないのよ。かわいいでいいのよ」、キャシーはいう、「かわいいが熟してａ　ｆｒｕｉｔ　ｏｆ　Ｎ・ｃｕｌｔｕｒｅになった。見て！　そのにぎやかなこと」
なるほど、とヤンヤ。改めてＮ社会を眺めてみる。かわいい、かわいいのブドウの房。
そしてとうとう外国の若者たちも、その甘いｔａｓｔｅやｌｏｏｋｓを味わい知り、…Ｎの有望な輸出品目になっている、いまや。

ヤンヤは独りで酒を飲む夜が多くなってしまった。
まいはウーロン茶を飲みながらそばにいるけど。
（耐えられなくなって話しかけてみても、いつも砂を噛む思いでボクが引き上げることになる）
横目にまいを見る、やや正面からしっかりまいを見る、ときどきヤンヤは。
まいは見られていることに気づき、下目になったり、それなりに彼を見返したりする。

ヤンヤ、（自分が惹きつけられた静かさ、謙虚さの実体はこれだったのか？　知的好奇心や人間への愛の浅さ。そういう欠如のようなものからくる静謐、おとなしさだった?!

有能な会社員、らしいけど、そしてその能力でボクを助けてもくれてるわけだけど、自分というものを実は持っていないのでは？　ただ一般的N思考に拠って、生物としての習い性で生きている。

いや、彼女にはとくべつの何か、ミステリアスな力があることはたしかだ。人の情感がもつ温かさ、悪意のない清浄な心、それらが慰安と人間への信頼を与える）

彼はとつぜん、オジのことを思い出す。いまはVのある図書館の館長をやっている。

ヤンヤが子供のとき、家にきて、やはり少し酒が入るとこぼし出したオジ。オジはあのとき深いため息をついて〈女性を二人愛しちゃいけないんだろうか？　ｗｉｆｅともう一人〉と言っていたようだった、〈足りないんだ、ｗｉｆｅじゃ、物足りないんだ〉

彼の愛情がｗｉｆｅになかったわけではない。家族も壊したいなどとは、思っていなかった。

（いまの自分にそっくり！）

〈虫がいいのかな？　こんな思い〉とオジ。たしか父親がうっかり母親がそばにいることを忘れて、〈そんなこたあない。Vの夫たちの共通の願望だ〉といった。

母親が怒るかわりに笑い出しながら、〈あら、Vの妻たちだって別の男を夢見てるわ、若くてセクシーでお金持ち〉と。

（まいもボクのような重苦しい男ではなく、軽快で実際的で金持ちの男を夢見てる?!）

彼は改めてまいを見る、はじめて彼女を見るかのような目で。

「何？」とさすがにまいも、けげんそうに。

「…君はボクの他にもう一人、恋人（boyfriend）がほしいとは思わない？」

「えっ?!」

「ボクにはない領域を埋めてくれる誰か」

「……そんなこと思わない」

「じゃあ、仮定としよう。お互いもう一人、別の異性、ボクはｇｉｒｌ　ｆｒｉｅ

ｎｄ、君はｂｏｙ　ｆｒｉｅｎｄをもったら、安定するとは思わないかい？　関係が」
「……」
「バランスがとれ、支えができる、気がする」
「……」

いつのまにかヤンヤはNで三年をすごした。まいと結婚して一年半。
シャステは四年の滞在を終えてFに帰るという。
「帰っても、坊さん、続ける？」とヤンヤ。
「とんでもない。ぼくは君のようにNの女性と結婚する勇気がなかったから、がまんして、坊さんやってたんだよ」
「そうなんだ！　ボクより君のほうがNに住みつけそうにも見えたのにね」
「あいにくと、むずかしい。ｐｒｅｔｅｎｄしてみたけどさ、N人の」
「ｐｒｅｔｅｎｄ?!　なるほど、そうだったの」
「F人に戻るよ、こんどはF人にｐｒｅｔｅｎｄして」
「また？」
「おかしいだろ？　ぼくは自分が何人かよくわからないんだ、ほんとのところ」
「…君自身でいいんだよ、国を抱えて歩かなくたって」
「?!君は気にならないの、自分のｉｄｅｎｔｉｔｙ。生まれたところや育ったところのこと」
「ボクはそこにアイデンティティを求めてないね、おそらく。ボクの、うーん、ボクという…」、口ごもるヤンヤ。
「存在の中に？」とシャンテが。
うなずきながらヤンヤ、「そう、そういうことだな、きっと」
シャンテは考えこんでしまった、そして「なぜ、そうできるの？」と。
「なぜって、…ボクらはたまたまどこかの国に生まれるんだろ？　そのたまたまを絶対的要因だとは思えない、人を規定するのに。ぼくたちがNで生まれ育っていたら、Nをｉｄｅｎｔｉｆｙしてたわけだろ？　Cで育っていたらCを、Kで育っ

ていたらKを」
「そりゃあ、そうだけど…」
「Fに戻っても、君自身を探せるよ。Nに置いてくわけでもFに置き忘れてたわけでもない。君のｉｄｅｎｔｉｔｙはいつも君の中にある」
「オゥ、先生、ありがとう」
「ウブッ、どういたしまして」

空港へシャンテを送っていった。
もういくどかきたNのインターナショナル空港の一つ。
初めてのときは一人で降り立ち、二度目はまいとVの両親・きょうだいにまいを紹介するため、三度目はその帰り。
これが四度め。
シャンテは浪人スタイルにしていたポニーテールの髪を切り落とし、肩の上でカールさせていた。
「オゥ、ナウイ男だったんじゃん！」、ヤンヤは覚えたN・Ｅｎｇｌｉｓｈでからかう。
シャンテはもともとｇｏｏｄ　ｌｏｏｋｉｎｇの、女性にもてそうな外貌をしていた。
「Nの女性が泣くぞ、君がいなくなって」
「とめてくれるなおとめさん、背中はリュックが笑ってる」、シャンテもわざとへたなN語で。
彼らはハグし合った、強く、長く。
孤独な日々を親しく分かち合い、埋め合った。
（忘れない。ありがとう）
「どこかでまた会えることを」
「うん。お互い居所を知らせ合おう」

シャンテはゲートを入ってうしろを振りかえり、手を振って行ってしまった。
ヤンヤは向きを戻して、あのエスカレーターの方へ歩きだす。

エスカレーターに達して、それに乗り、降りはじめる。
すれちがうエスカレーターで登っていく人たち。
と、その中にアジア系とも欧米系とも中東系ともわからない複雑な顔貌を見せた単独の女性が、彼を見た?か見なかったか? 登っていく!
ヤンヤの視線は彼女にひっぱられるようにうしろ上へ戻っていって、(どういう人なんだろう、彼女は? 知りたい、話をしてみたい。いまを逃したら…。オゥ、ボクは既婚者だ。まいだって目で選んだ。しかし彼女は…、まいとはちがう。まいのようにかわいくない。まいのように若くもない。全身からｉｎｔｅｌｌｅｃｔ(知性)とｌｏｖｅ(愛)の雰囲気が…、でもただの思い込みなのだろう、ボクの。
ボクの求めているものの幻影? をボクは見たのだろう。勝手なボクの心の投射、彼女はまるでちがっているのかもしれない、ボクが期待する人と)
だがエスカレーターを降り切った彼は、二つのレーンの間に佇んで、上を見上げたまま。